

時代で、互に争うて突厥と婚姻を結び、饋與を厚くして其の援助を得やうとし、遂に可汗をして「我在南兩兒、常孝順、何患貧也」(隋書突厥傳)と豪語せしめた有様であつたから、傳へらるゝが如き理由は兎も角もとして、自からを矜持する所以からも、當時支那に行はれた佛教を己の部にも導入れたことは、極めて自然のことゝ思はれるが、然も其の後何等の發展を見なかつたらうと思ふのは、唐の開元年間に當つてその部の默棘連可汗がまた唐に倣つて佛老の廟を起さうとした時に、臣下の敦欲谷が之を拒んで、佛老は人をして仁弱ならしむるもので武彊の術に非ずといひ、可汗も遂に之に従つたことが記されて居る(唐書突厥傳)。されば佗鉢可汗の時の佛教崇拜は恐らく一時的のもので、まだ流行の勢を作る程のものではなかつたらうと見るのが、適當の解釈であると思ふ。

西方に居つた突厥についてもまた其の流行の記事は存しない。玄奘三藏は印度に向ふ途次、素葉城(今のChu河畔のTokmak)で西突厥の葉護可汗に逢ふたが、其の際突厥の信仰の有様を記して、「突厥事火、不施牀、以木含火、故敬而不居、但地敷重茵而已、仍爲法師設一鐵交牀、敷褥請坐」(慈恩寺三藏傳)というて居るが、何等彼等が佛教を信奉したことは言及んでゐない。

突厥について漠北の地には回鶻即ち Uighur といふトルコ族が勢を振つたが、後に黠戛斯部キルギスの爲に破られて諸方に散じ、其の一枝は唐も終に近き懿宗の咸通七年(868)頃から、高昌即ち今の吐魯番ツルファンにちかきカラ・ホジャヤ(Kara Khodja)の地に據ること成つた。宋の太平興國七年(982)高昌國の回鶻に使を奉じた王延徳の紀行に據ると、高昌には佛寺五十餘區あつたことが記され、また唐朝給ふ所の寺額及び藏經經音等のあつたことも見えて居